

これはあやふやな実存の不安から超出して、確実な存在観に安心したいという情念の憧れを語るものであろう。さきの鮫鱈の詩の「くったりした死」という表現が、実存の「なれの果て」として、空無な虚無感に被われていたのに反し、この骸骨のイメージはすでにその領域を超え、即物的にも対象の精神的認識にまで到達している。

それだから作者は、この詩（骸骨について）の自注<sup>4</sup>にさらに次のことばをつけ足している。―「この詩の詩的情感は、不確かな、あやしい人間存在からの解脱への思慕なのであって、ハイデッカーの死にいたる存在の思惟につながる人間的情感なのである。」と。ここのように解脱はすなわち前述した実存の脱自・超出に該当する。

村野四郎の実存的詩作品は、このように虚無の深淵に架けられた

## 解釈と鑑賞

### 狭衣物語解釈 (8)

大きなるも小さきも、端毎<sup>つま</sup>に葺き騒ぐを、車より少し覗きつつ見過ぎ給ふに、言ひ知らず小さくあやしき家どもにもただ一筋づつ置き渡すを、「何の人真似すらむ」と、あはれに見給ひつつ、扇を箆に吹き給へる夕映の御

実存の美学であり、その形象化である。そこに虚無の絶望への頹落を逆に切り返す造型的詩人としての意志を発見する。

この作品から連想する先行作品中に中原中也の「骨」(詩集「在りし日の歌」昭12)があるが、それとの対照的考察を記す紙幅がもうない。また実存の死をテーマとする村野詩と異なり、戦後詩の、生の形成的あるいは集団組織の実存のありかたを表現する詩作品についても、もう後日にゆずるほかはない。

注― 山本捨三著「現代詩人論」。

2・3・4 村野四郎著「鑑賞現代詩Ⅲ」。

―昭和四七・九・一〇―

(本学教授)

### 本田義彦

かたち、まことに光るやうなるを、半蔭<sup>はじま</sup>に聚まりて見奉りめづる人々ありけり。御車など、今は大人しくなり給へれど、御供の御隨身などはいと若うをかしげにならばならず見ゆるを、「あはれ、あれが身にてだにあらば

や。何事を思ふらむ」と若き人はめで感ひて、過ぎ給ふも猶飽かねば、軒の菖蒲を一筋引き落して急ぎ書きて、はしたものをかしげなるして、追ひて奉る。後れて走る御隨身に取り寄せて帰るを、「いづこよりとか申さむ。やがて御車に参り給へ」とて捕へつ。御覽すれば、

知らぬまのあやめはそれと見えずと

も逢が門は過ぎずもあらなむ

とぞ書きたる。「いかなるすき者ならむ」とほほゑみて問はせ給へど、言はむやは。心疾き御隨身そのわたりに硯もとめて奉りたるして、たたり紙にかたかなにて、見も分かで過ぎにけるかなおしなべ

て軒のあやめのひましなれば

「今わざと参らむ」と言はせ給ひて、「童の入らむ所、確かに見よ」と宣へば、「半葎高く上げ渡して人々数多見え侍りつ」と申せば、「何人なららむ、見知りたりつるにや」とばかりは思せど、かやうのうちつけ懸想などは、わざと御心にも入らず、あるまじき事をぞ、いかなる折にも御心にとどめ給ふべかめる。

〔口訳〕

大きな邸でも小さな家でも、その軒先毎に菖蒲を葎き騒ぐのを、車から少しのぞきながら見過ぎなされるのに、言いようもなく小さく粗末な家どもにもただ一筋ずつずつと置いているのを、

「なんでむりして人真似するのだらう」と、気の毒に思つてご覧なさりながら、扇を箆代りに口にあててふく真似をしていらつしやる夕日に映えたご容姿は、ほんとに光るようにすばらしくていらつしやるのを、半葎のところを集まって見てはおほめ申しあげる女房たちがあった。御車など、今は大人らしく落ち着いたものにしておられるけれど、やはりお供の御隨身などはたいそう若くりっぱで、ふつうの御隨身などと違つてすばらしく見えるのを、「ああ、せめてあのお供の人の身にでもなつてみたい。いつも中将の君のおそばにいて、あの者たちはどんなことを思っているのでしょう」と、若い女房はおほめ申してはほんやりしてしまい、お通り過ぎになつてもまだ名残りが尽きないので、軒の菖蒲を一筋引き落として、いそいで手紙を書いて、召使いの女童できりょうのよいのに持たせて、あとを追っかけてそれをさしあげる。女童はおくれて走っている御隨身に取り寄せて帰るのを、「どなたかのお手紙と申し上げようか。このまま御車のところへおいでなさい」といつて御隨身がつかまえてしまった。手紙をご覧になると、

しら沼のその名のごとく人に知られたい沼の菖蒲のような私でございまして、どれがそれともお見分けもおつきにならないでしようが、蓬の茂つて荒れた粗末な私の門の前を素通りなされないでくださいませ。

と書いてある。「いったいどんな浮気女だらう」と、ほおえみながらお尋ねなされるが、使の女童がその名を言いましようか。言いはしないでしよう。よく気のきく御隨身が、その辺で硯を借りてきてさしあげたのを使われて、半紙に片假名で、

あなたのお家と見分けもつかないで通り過ぎてしまったことです。何しろどの家の軒にも菖蒲がひももないほどいっぱい並べて葺いてあるものですか。

と書かれ、さらに「そのうち改めてお尋ねいたしましょう」と、御隨身に言わせなされて、「女童のは入って行く家を確かに見とどけよ」とおっしゃると、御隨身が立ち帰って来て、「半部を高くずっと上げていて、女房たちが大ぜい見えました」と申すので、「誰だろう。見知っていた女かな」とだけはお思いになるけれど、このようなぶっつけの恋愛などは、特別御熱中なさるわけでもなく、あつてはならない源氏の宮への恋心を、どんな時にも御心におとどめなさるようなご様子である。

〔注記〕

○ただ「筋づつ」「ただ」という強意の語があるから、「言ひ知らず小さくあやしき家」のもどもが、貧乏であるために節物をして一木ずつ葺いている姿が思ひうかべられる。

○あはれに―右のように貧しい家の者がむりをして富裕な家の者の真似をしているところに「あはれ」を感じたのであろう。

○半部―ハジトミ。下半分は格子または簾板などを打ち、上半分を簾として外側へあげるようにしたもの。

格子―カウシ。寝殿造の建具の一つ。

細く四角な木を縦横に組み合わせて方眼に作ったもの。寝殿、対の屋などの四方をかこうもので、柱と柱の間にはめ、上下二枚にして、上のをとり上げ、下のを立てて置くようにした。

齧―ハタ。家の内部を外から見えぬようにおおい隠くす広幅の

板。

板扉の類。

葺―シトミ。軒の日よけ、雨風をよけるために、格子の片面に板を張った戸。

〔御車など今は大人しくなり給へれど〕この部分は、次のように諸註によってやや説を異にするようだが、私は「大人しくなり」を、「落ち着く」意に解して、以前には御車の様子などとはなやかなものであったが、今は大人らしく落ち着いたものにしておられるけれど、お供の御隨身などは以前と同じようにたいそう若くりっぱではなやかな様子である、と解しておいた。

全訳王朝文学叢書（吉沢義則著）

狭衣の乗ってゐられる御車などの様子は、さすがに御身分がら重々しいけれど、

日本文学全書（中村真一郎訳）

中将の車は、身分がらむやみと華美にはしたててはないが、

日本古典全書（松村・石川校註）

一人前の乗用車に召しているが、

日本古典文学大系（三谷・関根）

（コノ部分ノ本文ナン）

〔御隨身―ミズイジン。「隨身」とは、つき従う意から、平安時代以後、高位高官の者が外出する時、剣を帯び弓矢を持って供奉した近衛府の舍人。上皇は十四人、摂政・関白は十人、大臣・大將は八人など。「御」という敬称は、その主人の高位、高官に対する敬意。

〔何事を思ふらむ―きつと満足しているに相違ないという意を

含む。

○はたしたものの召使の女。または、召使の女の子にもいう。その時は「はしたわらは」ともいう。

○やがて御車に参り給へ―全訳王朝文学叢書や日本文学全書には、「このまま車に乗って行くがよい」とあるけれど、日本文学大系に「このままご主人（狄衣）の御車の所へおいでなさい」とあるのに従う。

○知らぬまのあやめはそれと見えずとも蓬が門は過ぎずもあらなむ

しらぬま―「しら沼」「知らぬ間にかける。「しら沼」は固有名詞かも知れないが未詳。

あやめ―萬浦」と「文日・様子」にかける。

この歌は、次のごとき詞書と作者名とがついて、風葉集と百番歌合とに見える。

風葉集・夏―帝いまだただ人におはしましける時五月四日の夕つかたうちよりまかで給ひける道に軒の萬浦をひきおとしてさじきより出し侍りける。狭衣の中務卿のみこの家小宰相。

百番歌合・十一番―位中将と聞えし時過ぎさせ給ふ御車に軒の萬浦をひきおとして、中務卿親王家の宰相、（第四句）「蓬が門」は「蓬が木 イ」

○すき者―物好きな人という意から、さらに、風流な人、好きな人の意にもなるが、ここは好きな人の意がよかるう。

○たたる紙―たたみ紙の音使。畳紙と書く。折りたたんで懐中に入れておき、鼻紙または歌の詠草に用いた紙。懐中に入れてお

くところから「ふところがみ」「くわいし」ともいう。

○かたかんな（片仮名）「かた」は不完全の意。「かんな」は「かりな」の音使で、さらに「かな」と音転。万葉仮名を基にして、案出された文字で、主として、その行書・草書の画の一部を省略して作られたもの。「平仮名」とともに「仮名」の一種。もと漢文の訓点記入用として男の世界で用いられ、平安初期（九世紀）から発達し、院政時代（十二世紀）にはほぼ現行のものに近い形を整えたが、古くは異体の文字も多かった。

狭衣物語では、なお「手すさびのように片仮名に書き給ひて」（巻三・下）とか、「片仮名に書きつけて」（巻四・上）などの

例があつて、歌を片仮名で書くことが当時の流行であつたかも知れないが、ここは、あるいは筆跡で自分の身分が知れることをはばかって、ふだん書く平仮名にしないで、片仮名で書いたのかも知れない。

○見も分かで過ぎにけるかなおしなべて軒のあやめのひきしなければ

この歌は、風葉集・夏の部に、前歌「知らぬまの」の歌の「御かへし」としてのせられてゐる。

○今わざと参らん―全訳王朝文学叢書や日本文学全書・日本古典文学大系などでは何れも「尋ねる」意に解しているが、日本古典全書では「手紙を書く」意に解している。しかし、「知らぬまの」の歌で「蓬が門は過ぎずもあらなむ」とあるのだから「尋ねる」意の方がよかるうと思ふ。

○うちつけ懸想

1、行きがかりの懸想（全訳王朝文学叢書）

2、假初に行逢ったものに思いを寄せる（桜・註日本文学大系）

3、利那的な恋愛（日本古典全書）

4、ぶっつけの恋愛（日本古典文学大系）

右のような解が諸註釈書によってなされているが、「利那的な恋愛」とは必ずしも言えないし、「假初に行逢ったものに思いを寄せる」が一番当たっているけれど、余りに説明に過ぎるので、「ぶっつけの恋愛」に従った。

○あるまじき事—全訳王朝文学叢書では「かうした恋の遊戯は深入すべき事ではない」と解し、日本文学全書も同じ解になっているが、日本古典全書の「どうかと思はれるやうな困難な恋となると」とあるに従いたい。さらには日本古典文学大系の「ただもうそんな思いをしてはならない筈の妹分の源氏宮への恋心ばかりが」というもつと具体的な解に従って、私も「あつてはならない源氏の宮への恋心」と訳しておいた。

○この庶民の家の描写は、源氏物語の夕顔の巻における夕顔の家のあたりの描写の趣に似ている。

（本学教授）

## 昭和四十六年度国文学科卒業論文題目

氏名 論 文 題 目

赤崎由美子 讚岐典侍日記における愛と死

荒嶽 久美 「球磨・人吉地方の人称代名詞」

井川美知子 お伽草紙——太宰治——

池田久美子 蜻蛉日記にあらわれた年中行事

石原八重子 宇津保物語における容姿美描写

岩本わかよ 坂口安吾論

岩崎 育子 狭野茅土娘子について——中臣宅守との関係から——

岩本 格子 紫式部と藤原道長

上田けい子 有島武郎作「或る女」（葉子の自意識についての一考察）

上田 陽子 雨月物語に及ぼせる源氏物語の影響

大熊万里子 お伽草子序論 芸術性私見——四作品について——

大塚 山子 懐風藻——文選の影響について——

落合 梶子 「海に生くる人々——色彩語と比喩から見た——

小畑 紀子 大分県国東半島方言の地理学的研究

甲斐よりこ 有島武郎の自我

加納 山美 芭蕉における色彩感覚について

川口ちづる 物語にみる立原道造

北川 道子 「夜明け前」を中心として

北村 益代 谷川俊太郎の詩——全体像に見るその変化——

工藤 秋代 若山牧水「みなかみ」考察

近藤すま子 「古事記」におけるアメノウズメ命に関する考察

坂田 朱実 田山花袋の作品における虚構

猿渡 とよ 平安鎌倉時代における「物す」考

柴田 政子 「一言芳談」について

島田佳代子 「平家物語」にみる平家盛

首藤三代子 雨月物語——剪燈新話との比較から——

白石 明子 小一条院考

城本 早子 赤染衛門に関する一考察——家集から見た人間像——  
杉本 典子 「平家物語」覚一本と流布本との比較——語りの詞章

研究の立場から——

砂原 博子 「今昔物語集からみた王朝時代の食生活」

瀬川 牧子 本居宣長の古道観について

高里恵利子 万葉びとの心情——動詞「見る」を資料として——

高宗ひろみ 書簡を通してみた芥川龍之介の世界——恒藤恭氏宛書

簡を中心に——

立川タカ子 纂物語についての一考察

田中 ミエ 吉行淳之介論

樋田いく子 「諸艶大観」その文学性

土屋 敏子 宮延寿歌に見る古代歌謡と天皇制下の影響

長井 博子 伊勢物語「東下り」の役について

中岡 京子 芥川龍之介の児童文学について

中島 民子 漱石の則天去私——書簡に表われた一側面——

中西 静穂 「徒然草における兼好の自然観」

中村 明美 「万葉集における食生活」

西山 孝子 和泉式部試論——その人間像を中心として——

野中 山美 「藤妻冊子」からみた秋成の短歌について

浜崎江里子 太宰治論——戦後の作品「斜陽」をめぐって

林田久美子 宮本百合子論

原 英子 告白小説にみる藤村の人間性——「新生」を中心とし

て——

日野 雅恵 万葉集の歌に於ける「者」字について

福山 知子 「にぎりえお力」考

藤瀬 康子 谷崎潤一郎の文体

松下ツルミ 「源氏物語」と「夜の寝覚」——その構成上の比較——

1

松下 都 万葉人の動物観について

松下 能子 謡曲にあらわれた伊勢物語——引歌を中心として——

三浦 節子 「好色一代女」について——懺悔を中心として——

山隈 加子 菊池郡合志方言における限定表現の研究

吉岡あけみ 「ハビヤン抄」キリシタン版「平家物語」における感動表現からの一

考察

吉田 信代 「建礼門院右京大夫集」における作者不明歌の研究

鷺岡真山美 阿蘇方言における文末詞研究